第８課　敗れた敵サタン

【暗唱聖句】

「兄弟たちは、小羊の血と自分たちの証しの言葉とで、彼に打ち勝った。彼らは死に至るまで命を惜しまなかった」黙示録12：11

【日曜日・女と竜】

「また、天に大きなしるしが現れた。一人の女が身に太陽をまとい、月を足の下にし、頭には十二の星の冠をかぶっていた。女は身ごもっていたが、子を産む痛みと苦しみのため叫んでいた。また、もう一つのしるしが天に現れた。見よ、火のように赤い大きな竜である。これには七つの頭と十本の角があって、その頭に七つの冠をかぶっていた。竜の尾は、天の星の三分の一を掃き寄せて、地上に投げつけた。そして、竜は子を産もうとしている女の前に立ちはだかり、産んだら、その子を食べてしまおうとしていた」黙示録12：1～4

　女とはイスラエル、あるいは神の民を指しています。貞潔な女性は忠実な信者を現わす一方、淫婦は背教したクリスチャンを象徴しています。この女は身ごもっています。つまり、イスラエルからメシアなるキリストが生まれるということです。身にまとった「太陽」はキリストのご品性をあらわし、「月を足の下にし」とは、聖書の約束を指し示しています。また霊的には忠実な残りの民が生まれ増え続けていくことをも象徴しています。

そこに竜が現れます。竜はサタンを象徴しています（場合によってはサタンに利用された異教ローマを象徴している）が、天の星の３分の１を掃き寄せ、地上に投げつけたとあります。この星とは天使のことであり、すなわち天使の３分の１が堕落し、サタンに従うものとなったということです。さて、この竜は子を産もうとしている女の前に立ちはだかり、産んだら、その子を食べてしまおうとしていたとあります。つまり、この世にメシアなるキリストが生まれたら、すぐに殺そうと狙っていたということです。実際にサタンはそのためにヘロデ王の心に入りました。ヘロデは救い主がお生まれになったことを知ると、幼子を皆殺しにしたと聖書に記録されています。しかし、サタンの企みをいち早く天使に告げられたヨセフとマリアは幼子イエスを連れて、エジプトに逃げるのです。こうして、救い主は守られるわけです。その後、サタンは群集の心を巧みにそそのかし、ユダを裏切らせ、キリストを十字架にかけさせます。サタンはこのとき、善と悪との大争闘に勝利したと思ったかもしれません。しかし、それもつかのまのことでした。なぜなら、キリストは復活したからです。十字架は勝利どころか、自分の完全なる敗北を意味していることをサタンは悟ります。そこで、今度は一人でも多くの人間を道連れにしようと、矛先を神の子たちに向けます。最初の殉教者ステパノ以降、時代を超え、国を超え、いつもキリスト者に大なり小なり迫害があるのは、このためです。しかし、その迫害の只中にあって、聖書は次のようにいいます。

「女は荒れ野へ逃げ込んだ。そこには、この女が千二百六十日の間養われるように、神の用意された場所があった」黙示録12:6

　ここに出てくる女は、忠実な神の子、あるいは忠実な教会と考えて良いでしょう。彼らは1260日というサタンが激しくクリスチャンを迫害するために許された時間、何もない荒野で神様から守られます。荒野は試練を象徴するのと同時に、この世から離れて神様と出会う場を象徴しています。そこで守られるのです。

【月曜日・地球に投げ落とされたサタン】

「さて、天で戦いが起こった。ミカエルとその使いたちが、竜に戦いを挑んだのである。竜とその使いたちも応戦したが勝てなかった。そして、もはや天には彼らの居場所がなくなった。この巨大な竜、年を経た蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれるもの、全人類を惑わす者は、投げ落とされた。地上に投げ落とされたのである。その使いたちも、もろともに投げ落とされた」黙示録12：7～9

人類まだ誕生する前に、天で一つの戦いが起こったと記されています。これが善と悪との始まりです。ミカエルというのは、「神のような人」という意味の言葉で、すなわちキリストの天での呼び名です。そのキリストが、天使たちとともに、竜すなわちサタンとその使いたちに戦いを挑んだのです。竜すなわちサタンに関して、旧約の預言者イザヤは次のように預言しています。

「黎明の子、明けの明星よ、あなたは天から落ちてしまった。もろもろの国を倒した者よ、あなたは切られて地に倒れてしまった。あなたはさきに心のうちに言った、『わたしは天にのぼり、わたしの王座を高く神の星の上におき、北の果なる集会の山に座し雲のいただきにのぼり、いと高き者のようになろう』。しかしあなたは陰府に落され、穴の奥底に入れられる」イザヤ１４：１２～１５

黎明の子、明けの明星、とはサタンのことです。彼は「心のうちに『わたしは天にのぼり、わたしの王座を高く神の星の上におき、北の果なる集会の山に座し、雲のいただきにのぼり、いと高き者のようになろう』と言います。この思いこそ、宇宙における罪の始まりなのです。自分を神のごとくに考える高慢さ、それが神の国の愛の一致、平和を壊していったのです。

「竜とその使いたちは応戦したが、勝てなかった。そして、もはや天には彼らの居場所がなくなった。この巨大な竜、年を経た蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれるもの、全人類を惑わす者は、投げ落とされた。地上に投げ落とされたのである。その使いたちも、もろともに投げ落とされた」黙示録12:8、9

すなわち、この善と悪との戦いは、こうしてその舞台を地上に移すことになります。さて、サタンは地上に落とされてから、ある最大の攻撃を神の勢力に対して加えようと画策していました。それは人としてお生まれになるイエス・キルストに攻撃を加えることでした。キリストが自らこの地上に降りてくる。しかも、神の力を捨てて、弱い人間として降りてくる。サタンにとって、これはキリストを攻撃し、その命を奪う最大のチャンスが到来することを意味していました。

【火曜日・地上の戦い】

「竜は自分が地上へ投げ落とされたと分かると、男の子を産んだ女の後を追った。しかし、女には大きな鷲の翼が二つ与えられた。荒れ野にある自分の場所へ飛んで行くためである。女はここで、蛇から逃れて、一年、その後二年、またその後半年の間、養われることになっていた」黙示録12：13，14

サタンは地上において「女の後を追った」とあります。これは忠実な教会の民を攻撃してくることを意味しています。しかし女には大きな鷲のような翼が与えられ逃げることができます。興味深いのは荒れ野にある自分の場所という表現で、何もないような荒れ野に私たちの場所がある。ここには悪魔も手出しできないのでしょう。「一年、その後二年、またその後半年の間」とは1260日のことであり、黙示録12：6の言葉が繰り返されているのだとわかります。この期間はローマ法王権力が確立された538年からフランス革命でローマ法王が幽閉され死亡する1798年までを指していますが、この間、忠実な民に対して激しい迫害があったのです。しかし荒野に神の民のために用意された場所があり、そこで守られたのです。歴史的には宗教の自由が与えられたアメリカを指していますが、霊的には今もなお、鷲のように力強い羽を得て、神の民たちはサタンの攻撃から守られるのです。ではどうしたらそのように翼をもって私たちのために用意された場所に入ることができるのでしょうか。

「主に望みをおく人は新たな力を得、鷲のように翼を張って上る。走っても弱ることなく、歩いても疲れな」イザヤ40:31

　主に望みをおくことです。そのような人は新たな力を得て、鷲のような翼が与えられ、上へ、上へと上がっていくのです。つまり主を信じる信仰の力によって、この逃れの場所に入るのです。

【水曜日・残りの者たちとの戦い】

「竜は女に対して激しく怒り、その子孫の残りの者たち、すなわち、神の掟を守り、イエスの証しを守りとおしている者たちと戦おうとして出て行った」黙示録12:17

終末時代における悪魔の攻撃対象は、単にクリスチャンとは言わないで、残りの者たちと言っています。彼らは神の特別な意思のもと、特別な使命を帯びて残された者たちです。だからこの残りの者たちに対し、サタンは激しく怒っているのです。この残りの者たちには2つの特徴があります。

一つは彼らは神の掟を守っていることです。これはクリスチャンとして当たり前のよう感じられるかもしれませんが、掟は破棄されて、別に守らなくても良いと教える教会はたくさんあるのです。戒めを守ることによって救われるのではありませんが、それは罪を努力では克服できないからであって、守らなくとも良いと言っているわけではありません。また、戒めを大切だと教えている教会の多くが第４条の安息日を守っていません。そのため、ここが残りの民のポイントとなります。ただし、そうは言うものの、戒めを一言で表すなら、それは「愛」であることを忘れてはなりません。この愛とは神様と人に対する愛です。

　それから、もう一つは、イエスの証を守っていることです。口語訳ではイエスのあかしを持っているものと訳されています。すなわち、その人の内にキリストが一つとなってすんでくださり、いつも無言のうちにもキリストの愛が香って、キリストが証されていく、そのような人々です。さらに「イエスの証は預言の霊である」（黙示録19：10）と書かれてあります。SDA教会は預言の霊を持ったエレン・G・ホワイトが与えられているという点でユニークな教会ですが、このことは残りの教会の条件であったのです。ただエレン・G・ホワイトが与えられたことで、何か自分たちが優れていると思うなら、それは大きな誤りです。パウロは「預言の霊を求めよ」と、すべての人に語っています。本来、預言とは神様から言葉を預かることです。それは神様の言葉つまり聖書を生きることを意味しています。それによってキリストの愛が証されていく人たちが残りの民なのです。結局のところ、イエスの戒めを守るということと、イエスの証を守り通すとは同じことを言っているのです。

【木曜日・終末時代のサタンの戦略】

最後のサタンの攻撃が戒めに忠実な残りの民に対するものであるので、それは御言葉から残りの民をそらすことに全力を注いでくることでしょう。間違った教えや惑わしによって攻撃してくるでしょう。背教した教会ではサタンの力による奇跡や心霊術が入り込んできます。「惑わす」という言葉は、黙示録12章から20章にかけて頻繁に出てきます。

「そして、大きなしるしを行って、人々の前で天から地上へ火を降らせた」黙示録13：13

しかし、獣は捕らえられ、また、獣の前でしるしを行った偽預言者も、一緒に捕らえられた。このしるしによって、獣の刻印を受けた者や、獣の像を拝んでいた者どもは、惑わされていたのであった。獣と偽預言者の両者は、生きたまま硫黄の燃えている火の池に投げ込まれた」黙示録19：20

このようなサタンの欺瞞になぜ騙されてしまうのでしょうか。それは「不法の者は、サタンの働きによって現れ、あらゆる偽りの奇跡としるしと不思議な業とを行い、そして、あらゆる不義を用いて、滅びていく人々を欺くのです。彼らが滅びるのは、自分たちの救いとなる真理を愛そうとしなかったからです」（テサロニケの信徒への手紙二2章9、10節）。